

平成22年度 10月号



二中だより

◆校訓 まごころ

◆学校教育目標 明朗 向上 自主・自立
《40周年テーマ 伝統と誇りある学校の創造》



新座市立第二中学校
新座市野火止7-17-10
☎ 048(477)1212

40周年記念体育祭 勝つも 負けるも 校長 森田 和 憲

かつて例を見ない猛暑だった今年の夏。その暑さの中で練習を重ねてきた40周年記念体育祭を、少し涼しくなったさわやかな秋晴れの中、多くのご来賓、保護者、地域のみなさまをお迎えして開催することができました。

3年生のリード

各色の組とも、練習の段階から団長を中心として、よくまとまり、色アピール、ビッグウェーブの練習では3年生から指示がよく出され、1・2年生もよくついていくことができた。

当日は開会式前から、各組が氣勢を上げ、盛り上がりを見せていた。引き締まった雰囲気の中始まった開会式、生徒会長渡邊君を先頭に入場が開始された。大きな声を張りあげて歌った校歌に、教育長さんは、「中学生が校歌をこれだけ懸命に歌う学校は少ない」と感激されていた。

多くのご来賓の方々から「表情が明るいですね」「どの生徒も本当に一生懸命にやっていますね」お褒めの言葉を多くいただき、二中の生徒を誇りに思った。

涙 涙 涙

どの組も精いっぱい取り組んだ体育祭、得点発表でクライマックスを迎えた。3位から発表され、白組は3位。がっかりした気持ちと悔しさが涙となってあふれる。1位となった青組は、歓声を上げ、喜びを全身であらわした。2位となった紅組は終始うつむいたまま。

色アピールの結果は、白組が1位となり、今度は喜びの叫びと涙があふれる。その光景を見ていたお母さん方も涙でぼろぼろだった。

体育祭の結果にこれほど気持ちをこめて取り組めた二中学生に、誇りを感じ、私も胸がいつぱいになった。

3年生は、去年の体育祭のあと、来年は自分が団長をやるんだという声が聞かれ、期待をしていたが、成長と頑張りは期待を

はるかにこえるすばらしいものだった。

二中のよき伝統を引き継ぎ、誇りを持っていることを強く感じると共に、あたらしい伝統を築いてくれた体育祭であった。

勝負のあとは

東京オリンピックの柔道の金メダリスト。オランダのアントン・ヘーシンク(76歳)さんがなくなった。東京オリンピックは昭和39年(1964)に開催、柔道が初めて競技として採用された。軽量級、中量級、重量級、無差別級の4階級で行われ、3階級は日本が優勝し、最後の無差別級。決勝はヘーシンク選手と日本の神永昭夫選手の戦いとなる。身長差で大きく上回るヘーシンク選手が、神永選手の投げを崩してそのまま押さえ込み、優勝した。当時小学校2年生だった私も、日本の柔道が敗れたシーンが記憶に残っている。日本が柔道で敗れることなどあり得なかった時代だった。当然オランダチームは歓喜にわき、豊に駆け上がろうとした。それを、強く制止したのはヘーシンク選手だった。「神永はまだそこにいる」チームの喜びを制し、敗者を尊重する心、日本の武道の心を備えた金メダリストだった。

柔道も世界のJUDOとなり、最近では日本の選手が勝つことが容易ではなくなった。今年の世界柔道選手権では多くの日本の金メダリストが誕生したが、ヘーシンク選手の心をもった選手も幾人か見られたように思う。勝負のあとの相手を大切に作る心、体育祭の生徒たちの歓喜と涙に重なるものがあった。

さわやかな後味のある体育祭であった。

